

インフルエンザA型(H1N1)

<第18報>

2009年12月15日

HEADLINES

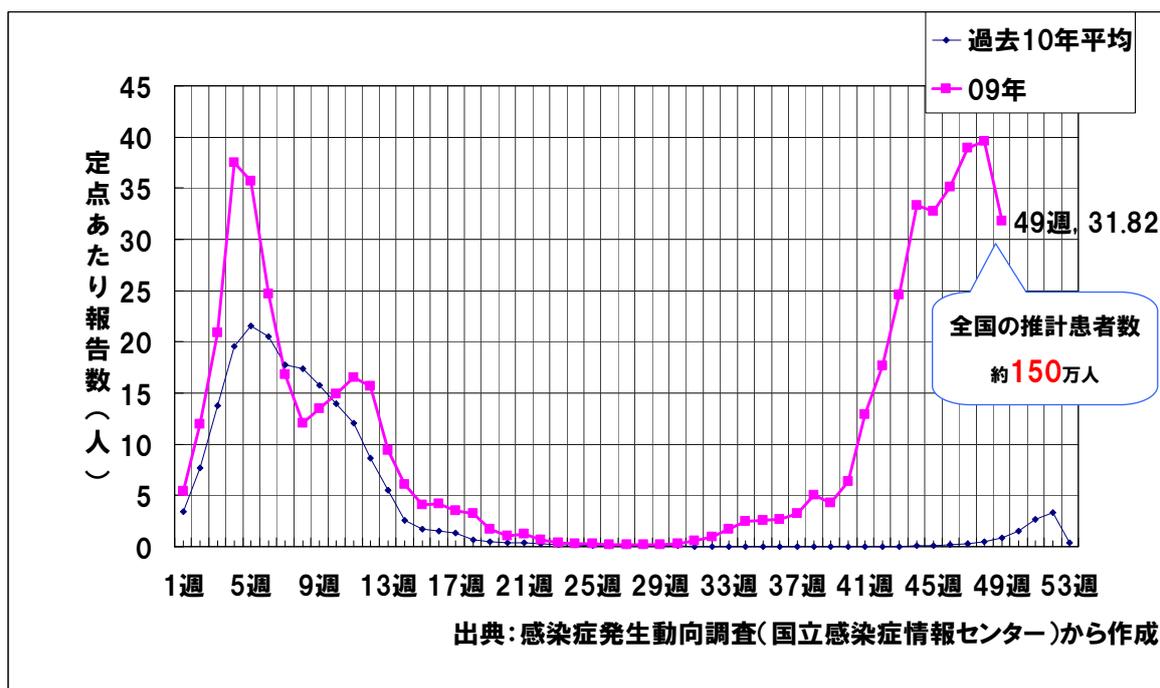
- ◆ 全国定点当たりの報告数 高水準続くも前週比で減少に転じる
- ◆ 感染者の8割が20歳未満
- ◆ 感染しても症状の出ない事例も 感染研と教育機関の調査で判明
- ◆ 過去1週間の死亡例は40歳代以上
- ◆ 欧米でも感染の減少傾向
- ◆ 今後の取り組み

全国定点当たりの報告数 高水準続くも前週比で減少に転じる

厚生労働省が12月11日に発表した2009年第49週(11月30日～12月6日)のインフルエンザ感染状況によると、全国約5,000カ所の定点医療機関当たりの患者の報告数は31.82となり、前週の39.63から減少した。全国平均の値は流行の警報レベルを示す30を超えているものの、全47都道府県中、青森と徳島の2県を除く45都道府県で減少したことから、第27週(6月29日～7月5日)からほぼ一貫して続いてきた感染拡大が、縮小に転じた可能性がある。

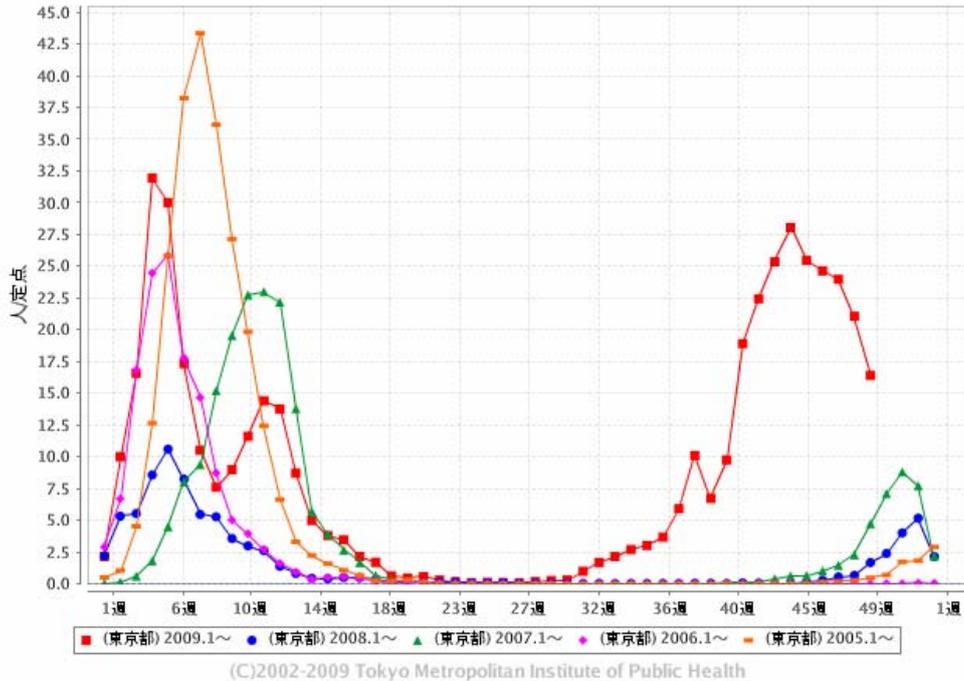
この1週間に全国の医療機関(定点以外を含む)を受診した患者数は約150万人と推計されており、今夏以降の患者数の累計は1,414万人に達したと見られている。

表1: 定点あたりの報告数



これまで、新型インフルエンザは人口の多い東京都などの大都市で早い時期に感染が広がった。その影響もあってか、新規の感染者の数も全国より早く減少に転じており、この傾向が全国的に広がってきた可能性がある。東京では第 44 週（10 月 26 日～11 月 1 日）にピークを迎え、その後は 5 週連続で減少している。首都圏の神奈川、千葉、埼玉の 3 県では 2 週連続で減少、愛知県や大阪府などでも減少傾向が見られる。

表 2: 東京都における定点あたりの報告数



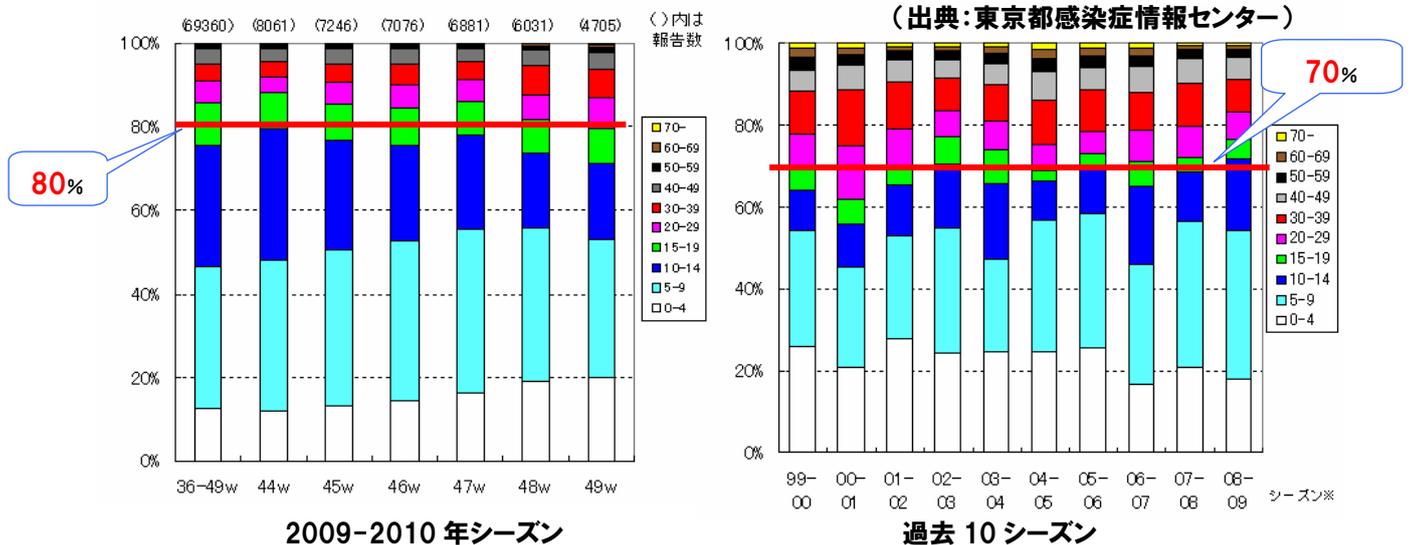
(C)2002-2009 Tokyo Metropolitan Institute of Public Health

(出典: 東京都感染症情報センター)

感染者の8割が 20 歳未満

今回の新型インフルエンザの大きな特徴は、季節性インフルエンザに比べて若年層に感染が集中していることだ。下記は東京都が 2009-2010 年のインフルエンザ・シーズンと過去 10 シーズンの感染状況を年齢階級別に比べた表である。緑より下が 20 歳未満だが、左の新型インフルエンザでは 80% を占めているのに対し、季節性インフルエンザでは 7 割前後に留まっている。また、高齢者（薄い茶色と黄色）の新型インフル感染が少ないのも特徴である。

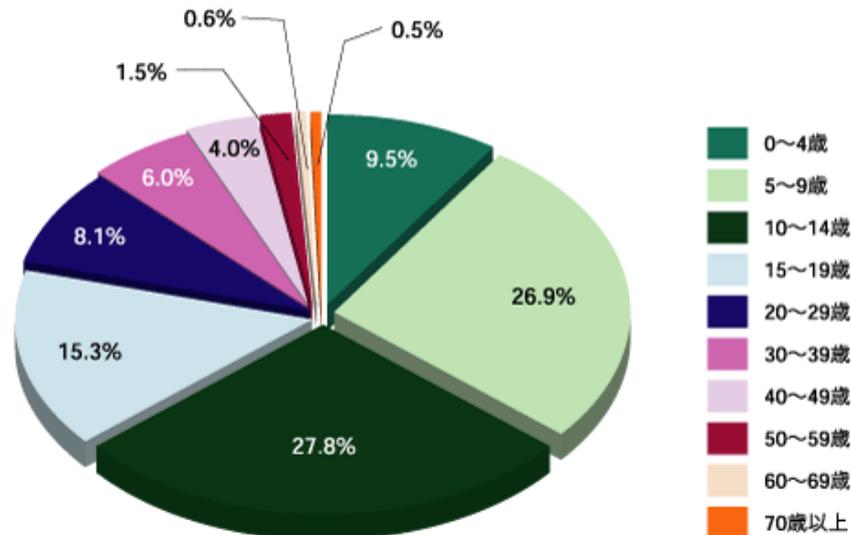
表 3: 今季と過去 10 シーズンの年齢群別割合



(出典: 東京都感染症情報センター)

全国レベルでも 20 歳未満の感染者が全体の 79.5%、約 8 割を占めている。第 28 週から第 48 週（7 月 6 日～11 月 29 日）までの累積の推定患者数は 1,264 万人だったことから、その 8 割の 1,000 万人超が 20 歳未満だったと言える。総務省統計局が国勢調査を基にまとめている人口推計月報（2009 年 11 月）によると 20 歳未満の人口は約 2,317 万人だった。すでに、その半数弱が新型インフルエンザに感染したことを意味する。このように、これまで感染しやすいとされてきた若年層の多くがすでに一定の免疫力を持ったことが、全体の感染拡大のペースを遅くしたとも考えられる。

表 4 全国のインフルエンザ推定受診患者の年齢群別割合(第 28～48 週)



(出典:国立感染症情報センター)

感染しても症状の出ない事例も 感染研と教育機関の調査で判明

大阪府公衆衛生研究所は 12 月 11 日、5 月に新型インフルエンザの集団感染が発生した私立関西大倉中学・高校の生徒らの抗体を 8 月に調べたところ、感染した生徒らの約 2 割で症状がなかったことが判明したと発表した。同研究所は国立感染症研究所と共同で 8 月に生徒や教師ら 647 人の血液を採取して検査した。その結果、102 人が採血までに感染していたことが判明した。アンケート調査に照らし合わせて分析したところ、102 人中 18 人は全く症状がなく、36 人が軽症だったという。

専門家らは、新型インフルエンザに感染しても自覚症状のない例が多数報告されたことを受け、実際の感染者数は公表されている数字よりさらに多い可能性があるとして指摘している。現在の感染者数の統計は、インフルエンザのような症状が出て病院で診察を受けた数字を基にして推計している。

過去1週間の死亡例は 40 歳代以上

新型インフルエンザ感染者の死亡例は引き続き報告されている。一時期は 10 歳未満の死者が相次いだが、過去 1 週間の死亡例の報告を見ると、40 代が 1 人、50 代が 1 人、60 代が 2 人、80 代が 1 人で、いずれも何らかの基礎疾患があった。死亡例の年齢層の変化が意味するところは不

株式会社 損保ジャパン・リスクマネジメント

明だが、20歳未満の若年層・子供と、基礎疾患のある人は感染予防を徹底するなど注意が必要である。

	10歳未満	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80歳以上	計
死者数	24人	5人	5人	8人	15人	16人	15人	13人	13人	114人
基礎疾患の有無	6人	4人	3人	6人	11人	11人	15人	12人	13人	81人

(厚生労働省の発表を基に当社にて集計)

欧米でも感染は減少傾向

世界保健機関（WHO）は12月11日、世界の新型インフルエンザの感染状況を発表した。北米では米国で5週間連続、カナダでも3週間連続で新たな感染者の数が減少している。このほかの地域の感染状況は下記の通り。

欧州：

減少	ドイツ、オランダ、イタリア、スペイン、ポルトガル、ロシア
増加	フランス、ポーランド、ルーマニア

中東・南アジア・中央アジア：

減少	アフガニスタン、イスラエル、オマーン
増加	イラン、イラク、ヨルダン、インド（北西部）、カザフスタンやキルギス

東アジア：

減少	中国（北部）
増加	中国（南部）、香港、台湾

南半球では散発的に感染が確認されているものの、集団感染等の大規模な感染の報告はない。アフリカでは情報は限定的ながらも、アフリカ全土で感染が確認されている。（南アフリカはインフルエンザの季節が終わり、感染は収束している）

今後の取り組み

第49週（11月30日～12月6日）に感染者数が減少に転じ、各都市では減少傾向が顕著になっている現状を踏まえると、今後、感染の拡大が一旦は収まる可能性がある。しかし、今後本格的なインフルエンザの季節を迎えるため、決して油断は許されない。インフルエンザ感染の動向がどのように変わっていくか、それを予測するのは非常に難しい。新型インフルエンザが再び猛威を振るうのか、毒性が変化するのか、あるいは季節性インフルエンザと並行して感染が広がる可能性など、いくつかのシナリオが考えられる。インフルエンザの流行による欠勤率の増加などに備えて、感染が収まりつつある今こそ感染予防、事業継続の準備・対策を実施し、引き続き感染状況に関する情報収集を続けることが求められる。